

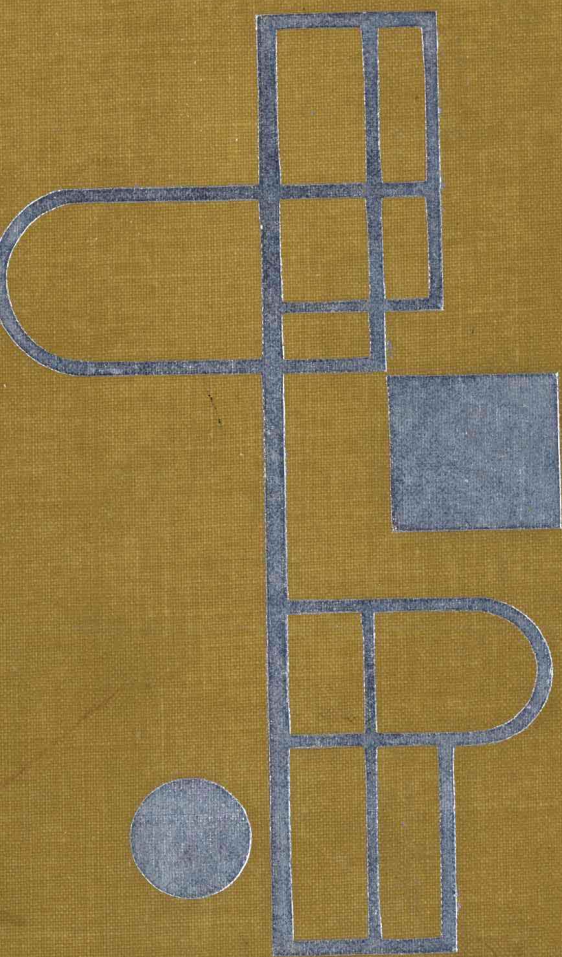
現代譯詩集

93



現代日本文學全集

93



現代譯詩集

現代日本文學全集

93



筑摩書房版

現代譯詩集

昭和三十三年十月二十五日 印刷
昭和三十三年十月三十日 發行

著者 佐藤春夫

發行者 古田晁

印刷者 山田一雄

發行所 筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八
印刷 株式會社 精興社
製本 矢島製本所

現代譯詩集 目次

於母影（新聲社）		五
海潮音（上田 敏）		一七
牧羊神（上田 敏）		四三
珊瑚集（永井荷風）		六八
白孔雀（西條八十）		八五
明るい時（高村光太郎）		一二五
草の葉（有島武郎）		一二六
まざあ・ぐうす（北原白秋）		二〇三
月下の一群（堀口大學）		二三一
車塵集（佐藤春夫）		二四八
山内義雄譯詩集		二六三
海表集（日夏耿之介）		二九五

解 說	四二九
作者紹介	四三六

裝 幀 恩 地 孝 四 郎

現代譯詩集

於 母 影

新 聲 社

陸奥のまのゝかや原とほけども
おもかげにして見ゆとふものを
岷峨 天一 方雲 月在我側

萬葉集
東坡詩

いねよかし

その一

けさたいでし故里は
青海原にかくれけり
夜風ふきて鱸きしれは
おどろきてたつ村千どり
波にかくるゝ夕日影
逐ひつゝいはる舟のあし
のこる日影もわかれゆけ
わが故郷もいねよかし

その二

しばし浪路のかりのやど
あすも變らぬ日は出でなん
されど見ゆるは空とうみと
わがふるさととは遠からん
はや傾きぬ家のはしら
かまどにすだく秋のむし
垣根にしげる八重華
かど邊に犬のこゑかなし

その三

こなたへ來よや我わらは
何とて涙おとせるか
釋ごゝろに恐るゝは
沖のはやてか荒なみか
はらへ涙も世のうさも
この大舟はいと強し
翼にほこるはやぶさも
かばかり早くはよも飛ばじ

その四

その五

あらきは海のならひとぞ
高き波にはおどろかず
サア、チャイルドな驚きそ
わが悲みはさにあらず
父にはわかれなつかしき
母には離れ友もなみ
世には頼まん人ぞなき
たのむは神と君とのみ

その六

父はいたくも泣かざりき
さすがに思ひあきらめて
されどまた世に力なき
母はなぐらん歸るまで
あなといはしの我儘
涙のつゆぞうつくしき
心だにかく優しくば
わが目もいかに乾くべき
こなたへ來よや我しもべ
色蒼ざめしは何故か
フランス人は來ずこゝへ
あるは寒さをいとひてか
サア、チャイルドよ弱りても
敵を恐るとな思ひそ
氣色あしきはつれなくも
わかれし妻を思ひてぞ

その七

君が族のすみたまふ
濱にちかきわがとまや
ちいは何處と子等は問ふ
妻の答はいかにぞや
といへど泣かぬ我しもべ
これもふさはし猛き身に
なんたちに似すとつ國へ
われはたちけり戯れに

その八

こゝろ卑しき女郎花
あだし人をや招くらむ
きのふ涙にまだぬれし
たもとも今日は乾くらん
泣かぬ我身あはれなる
かくまでさびしき人や誰
われを泣かせんばかりなる
人のなきこそかなしけれ

その九

沙路にまよふ舟一葉
身の行末もさだまらず
わが爲に人なげかねば
人のためにもわれなかず
あだし主人の飼ふ日まで
聲かしましく吠ゆれども
むかしの主の音をせて

歸らば囃まんわが犬も

その十

舟よいましを頼みては
わが恐るべき波ぞなき
故里ならぬ國ならば
いづこもよしと極みなき
海に泛びぬ里遠み
陸に上らば木がくれし
むろにや入らん山深み
わが故里よいねよかし

月光

Dein (gedenkend) irr-
ich einsam

思汝無已孤出蓬戸
Könten tauschen

wir gemeinsam

安得俱汝江上相聚

安得俱汝江上聯袂
時自前岸平野之際

光彩飛散其色銀白
虹也千丈中斷潮脉

Diesen Stro-
m entlang;

沿岸行且吟
Seinen We-
lenklang...

聞此流水音

瞻仰天色開
明月徐上來

遙達幽樹叢
依約凝架虹

ミエンの歌

其一

レモンの木は花さきくらき林の中に
こがね色のしるは枝もたわいにみ
青く晴れし空よりしづやかに風吹き
ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く
くもにそびえて立てる國をやるか
君と共にゆかまし

其二

逢此光彩輝映相逐	看到汀樹影之處	吾所希眼波一搖耳	期汝時聽登倒吾屣	昏黑生路如大江水	逢汝時又看李花面	生路流水如箭如電
波亦心自怡	茫忽疑有無	何日能得償	深夜空決眸	嗚咽停不流	明月將失妍	嗟奈其瞥然

高きはしらの上にやすくすわれる屋根は
そなたかくそばだちひろき間もせまき間も
皆ひかりかゞやきて人かたしたる石は
ゑみつゝおのれを見てあないとしき子よと
なぐさむるなつかしき家をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其三

立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて
いなきついでにまよひひろきほらの中には
いと年経たる龍の所えがほにすまひ
岩より岩をつたひしら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

思 郷

離郷遠寓椰樹國
思郷念或熾
聽此熟耳響

獨有潮聲似窮北
即走海之濱
鬱懷得少伸

笛の音

少年の巻

その一

君をはじめて見てしとき
そのうれしさやいかなりし
むすぶおもひもとけそめて
笛の聲とはなりにけり

その二

おもふおもひのあればこそ
夜すがらくはふきすさべ
あはれと君もきいねかし
こゝろこめたる笛のこゑ

君をはじめて見しときは
やよひ二日のことなりき
君があたりゆ風ふきて
こゝろのかすみをはらひけり

おぼろ月夜のかげはれて
さやけき光のそのうちに
みゆるかつらのその花は

その三

う。れ。い。や。君。が。名。な。り。け。り
う。ら。は。づ。か。し。と。そ。を。み。て
奥。へ。な。ふ。か。く。い。り。玉。ひ。そ
欄。干。ち。か。か。へ。り。き。て
し。ば。し。は。き。い。ね。わ。が。う。た。を

にげつゝ君はかくるとも
わがふく笛はやまざらむ
かげをば君はかくすとも
君ゆくかたにひゞきてむ

そのふく笛の音に添へて
おのがおもひはつたへなむ
そのふくこゑをたのみきて
さきのうたをばうたひなむ
う。ら。は。づ。か。し。と。そ。を。み。て
奥。へ。な。ふ。か。く。い。り。玉。ひ。そ
欄。干。ち。か。か。へ。り。き。て
し。ば。し。は。き。い。ね。わ。が。う。た。を

その四

岸邊にたちてわれふけば
風もこゝろやありぬらむ
その音を遠く君がすむ
城のうちへぞつたへたる

ながれさやけきライン川
きよき波間に月うかぶ
そこねぶれる龍さへも
きこ夢をばさますらむ

ながれさやけきライン川
きしの松風音ひびく
そこすむてふ神さへも
うきて波間にきうつらむ

千たび百たびくりかへし
ふく笛の音はかはれども
こひしき人のこひしさに
ふくとこそきけその聲を

その五

月にうき雲はなにかぜ
おもふにまかせぬ世なりけり
ちぎりしことは夢に似て
はやくもわかれとなりけり
嬉しきかけのうつれるを
みてけり妹が目のうちに
わがよたのしくなりなむを
おもへばはかなき世なりけり

なれしふるさと出でしより
やつれはてたる旅ごろも
よのうきことはしりてけり
ねたきこゝろもかなしさも

嬉しきゆめをみてましを
君がま玉手まくからに
わがよたのしくなりなむを
おもへばはかなき世なりけり

高ねすぎゆく雲のみか
木々にもさわぐ風のこゑ
今朝のわかれのこゝろをば
そらにもしらむ村しぐれ

いづこにこの身はわかるゝも
いかでわすれむ君ひとり
わがよたのしくなりなむを
おもへばはかなき世なりけり

姫の巻

その一

かれのいでたつそのさまは
をしくたけくみえにけり
をしくたけくありながら
やさしきさまもみえにけり

七の城のぬしなりとも
いかでかれにはまさらむや
さはさりながら戀人の
身は兵卒にあらざらば

士官の身にてあらむには

劍にこがねのふさあらば
くるしかりけりわが戀は
かなしかりけりわが戀は

その二

妾がかれとかたらひて
はや二日とはなりにけり
おもひはちどにうちみだれ
こゝろはなりつそらにのみ

花うるはしくかざりおきて
朝夕きよめしねやのうち
人見ばいかにわれながら
いぶせきまでにみだれたり

さうびの花もなでしこも
うちしをれつゝわれをみつ
水とおもひて酒をしも
わすれてわれはそいぎけむ

軒ばはなれぬ白鳩は
うゑになくなりこのゆふべ
籠のうぐひすの聲せぬは
あたへむ餌をやわすれけむ

しろ妙ならむあみ物に
などまじへけむ赤きいと
五いろなりとおもひしに
これはたおほし白きいと

わがよむふみの見えざるは
かざしの匣にやいれつらむ
いづこゆきけむそのふみよ
小櫛とともにやつゝみけむ

つげのをぐしに花かざし
ともに文箱のうへにあり
まよひにけりなわがこゝろ
あまりに人のこひしさに

その三

遠くうき世にいでさりぬ
われにはわかれをつげやらす
うたひうたひてゆく君よ
こゝろとたのむわが君よ
いつかかへりてきますらむ

かたりあひたるほどもなく
さめしはまことの夢なるか
などかの人にあひにけむ
などかの人をこひにけむ
はかなきわかれとならんには

かれはいづこへゆきにけむ
うき世はいつはりおほかるを
イタリへこそはゆきにけめ
かしこの女はあだときけ
神にいのらむわがせ子を

別後の巻

その一

うれしとしはしはおもひしを
はやかなしみのめぐりきぬ
わが身のさちとたのみしを
はやうきことのめぐりきぬ

すみれかたばみかれはてゝ
むかしの色も今はなし
戀しき人をふりすてゝ
わがゆく道ぞ雪ふかき

深山にかりするさつをらも
よきさちのみはなしとかや
身のゆくすゑはしらねども
しげくやあらむうさつらさ

その二

いほかぜあらきあら磯に
ふかれてたてるそなれまつ
よせくる波にうちをられ
岸をばとほくはなれゆく

みどりの波のそのうちに
うきついつみつみえにけり
かもめの鳥の數あまた

とびてあたりをめぐるなり

夜ふかき波に月さえて
おきべをとほく舟ぞゆく
をりうたのきこゆるは
ものおもふ人やこぐならむ

あはれラインの岸にわれあらば
妹にかたらむわがこゝろ
あはれ故郷、故郷なつかしや
妹しるらむわがこゝろ

その三

舟しはつれば夕日かげ
波のあなたにかたぶきて
さらぬもさびしきひとり旅
かねの聲さへひびくなり
あはれこひしや吾妹子

岸のいはほにまくらして
ものおもふ身こそかなしけれ
あしのもとには波よせぬ
こゝろのうちに夢うかぶ
あはれこひしや吾妹子

その四

イタリの女はわが目には
おそろしくのみみえにけり
かれのすがたはやさしくも

いかでかわれはまどふべき

アルペン山のそのふもと
ラインの川のそのほとり
一もと立てり花さうび
おのがおもひは今そこに

イタリの女はわが目には

おそろしくのみみえにけり
かれのすがたはやさしくも
いかでかわれはまどふべき

その五

み雪のふかくつもりきて
世はしろたへになりにけり
火桶にたきぎををりそへて
ひとりむかしをしのぶなり

薪もつきて火もきえて

今は灰とぞなりにける

もゆるおもひはつきねども
これやわが身のをはりなる

今よりものはおもはじと
ひとりこゝろに誓へども
笛みるたびにふくごとに
猶なつかしや吾妹子の

その六

年もくれけり妹はいかに
いよ／＼まさるわがおもひ
年もくれけり妹はいかに
いよ／＼まさるわがおもひ

をしくたけきますらをも
今はかなしや籠のとり

戀しきかたに翔らむと
おもへどかひもなかりけり

日ごとに笛は手にとれど
昔のうたは今いづこ
朝夕笛はふくなれど
むかしの聲は今いづこ

むかしはラインの川ぎしに
おもしろき音もふきたるに
今はスチンの寺の内に
悲しき歌のみうたふなり

あまをとめ

浦つたひゆくあまをとめ
舟こぎよせてわがたてる
ほとりにきたれわれと汝
手に手とりあひむつびてむ
こゝろゆるしてわが胸に

なが頭をばおしあてよ
浪風あらきわたつみに
まかせたるてふ身ならず
そのわたつみにわがこゝろや
さもにたりけり風はあれど
鹽のちひはありといへど
こゝらの玉もしづみつゝ

花薔薇

わがうへにしもあらなく
なかくおつるなみだぞも
ふみだかれしはなさうかは
よはなれのみうきよかは

わかれかね

わかれかね心はうちにくるとも
しらでやひとの戸をばさすらむ

鬼界島

鬼界の島在何處、雲濤浩渺不可渡、

五穀不生田土瘦，維昔治承戊戌秋，王家未免式微嘆，慷慨有人聚壯士，何物發見泄祕謀，三人同謫孤島中，雄心寂寞消磨盡，誰識禍福與時轉，遺恨千年天無情，北望黯然魂欲消，濤聲入枕眠不得，京師蟻王果何者，偶聞流入蒙赦飯，簞笠出迎鳥羽村，但見二轎向京至，聞道罪深歸不得，向人數々問歸期，僧都有女年十三，零落孤身托何處，茅庵兩畝風日美，門前乍聽響，竟然相見未語淚先垂，欲向海南問消息，少女聞之喜且泣，欲封又開，又封，江南四月草萋々，春色已歸人未返，孤身直欲報恩遇，行李蕭然出鄉關，

山谷深汨多，大樹平氏威權加八洲，天子下堂見諸侯，夜深鹿谷誓生死，一朝緣囚百事止，蠻烟瘴雨又颺風，身如斷梗髮似蓬，又見流人蒙赦免，尚有僧都留不返，浮雲積水路迢々，憂心耿耿度永宵，僧都恩遇尚所荷，竊喜僧都亦免禍，烟雨空濛畫向昏，不見僧都空斷魂，餘生尙托蛟龍域，歸期何日絕消息，山櫻經雨紅半含，南都城裡古茅庵，滿地落花無聲賦，即是鐵王尋女至，但道赦免不可期，請君試寫相思辭，千行紅淚筆々濕，慙慙相托更嗚咽，千山花落杜鵑啼，暮雲遠樹魂轉迷，菽水拳拳寧遑顧，獨上蒼茫雲海路，

雲海蒼茫一葉舟，唯一封藏警裡，任地形容太枯槁，又從薩州托買船，島中風景異京華，芳草滿郊青漠々，逢人輒問僧都跡，誰知京洛寺門僧，中有一人能解心，不知今日在何處，山高谷深行路窄，一徑窮處荆棘深，轉步更向海邊行，四望蒼然人不見，乍認老翁來海上，瘦臂倒提數尾魚，相逢先問僧都蹤，兩人相對掩顏泣，謝汝能凌淼漫海，回首往事都如夢，唯賴歸人懇慰余，飛雁不來天地長，島中固不事稼穡，瘴烟深處採硫黃，爾來身力日愈衰，時從漁人請魚去，天涯誰復憐落魄，從此與汝携手去，乃沿海上又曳筇，

雲渺々兮水悠悠，海上自防荏苒憂，行盡西海萬里道，布帆無恙達孤島，不見田園種桑麻，一路荒村落日斜，言語不通手加額，今作天涯淪落客，言是前日澤畔吟，須向峰巒深處尋，風氣襲人天欲夕，晚風淒々亂雲白，路上沙清鳥迹明，烟波深處海鷗鳴，倚杖大息氣慘愴，破衣亂髮無人狀，寧料僧都是老翁，談今話昔感無窮，万里來尋忘身殆，欲死未死身猶在，荏苒久待京師書，幽憂之裡送居諸，幾爲衣食勞身力，賣與商人換衣食，不踏窮山僻水危，又拾蚌蠣充調飢，蕭然獨結環堵宅，通宵交膝話今昔，巖邊遙認一株松，

松影參差蔽孤宅，且道秋宵明月色，夜半時聽風雨聲，桑門昔日着袈裟，滿室香烟長不絕，自古人生似夢幻，一朝誤作遷謫客，言終唯有淚潸潸，說盡往年多少事，尙記當年謀泄日，奪略家財無所遺，此時夫人携兩兒，有時往來問安否，幼君不解當年事，常道家嚴在遠方，噫吁死生皆是天，夫人日夕思慕切，唯喜令娘今尚健，來時就求一紙書，僧都展書讀幾回，搔者終身寧忘起，蒿萊之中無曆日，花發知春葉落秋，三年孤島日遲々，被執寧知爲永訣，苦辛不願在人事，絕食兩旬遂易床，時聽蟻王哭泣聲，孤身豈惜試螻蟻，

草扉竹櫺碧苔封，皎々何意入戶側，濕入敗衾身自識，玉殿金樓作我家，木魚聲裡寄生涯，江湖何事足憂患，往事茫茫不可諫，此時蟻王亦慘傷，每談一事一悲傷，捕卒幾十來入室，殺人如麻何知恤，鞍馬山下去栖遲，談到主君便增悲，只喜孤臣左右侍，與汝相携到其地，幼君何意去茫然，又辭人世客黃泉，獨赴南都依親近，開書出書通信問，書中只道早歸來，赦恩猶未及蒿萊，只有氣候分寒熱，夏聽蟬聲冬見雪，憶起當年被執時，天涯地角長相思，一死唯分葬荒裔，海雲慘澹水空逝，俄隔幽明若爲情，只當香火祈後生，

遺骸空付一炬火、
又整旅裝辭孤島、
關山秋色滿歸途、
青鞋踏盡幾險艱、
旅裝直訪僧都女、
天地有情亦應泣、
可憐當日小雲鬟、
蟻王亦携白骨去、
高野山高入雲漢、
鬼界之島在何處、

收拾白骨囊裡裹、
薩摩海上再泛舸、
落日空林啼晚鳥、
寒風冷雨入南都、
孤島苦辛相對語、
海內無人解愁緒、
一朝削髮入禪關、
飄然立上高野山、
南望蒼海空長嘆、
萬古愁雲凝未散、

わが星

おもひをかけしわが星は
光をかくしにづこにて
たれのためにかかいける
心もそらに浮くもの
かゝるおもひをふきはらふ
この夕暮にかぜもがな
すゞしく茂る夏木立む
なにをやさしくそよぐらむ
緑色こき大そらは
なにをやさしく見下せる
あるかひもなき世の中の
卯月しりてや天の戸を
鳴てすぎゆくほとゝぎす
しでの山路のしるべよ

あしの曲

日はかたぶきけりあなたの峯にぬ
ひねもすつかれしひるもねむりぬ
この池の面にみどりの色のいと
ふかくもうつれる青柳のいと
はるけくへたる人をしのびて
袖はうほひぬ涙の露にのぎ
このはあはれに柳そよぎて
夕暮のかぜにふるふあしの葉
深くもつゝめる我かなしみを
さやかにおらせなつかしの君
あしと青柳の影をのぞくとくに
照わたるほしの影をのぞくとくに

あるとき

おくつきの前にふたり立ちぬ
にはこの花は香にほひて
夕暮の風に草葉そよぐ
乙女はさいやくもほそく
我身はこの世をさりたる後

よみにし歌のみ猶ながらへ
君はひろき世にとり残され
共にかたらん友もなくば
思ひ寐の夢にわれを見なば
にはこの花とさうびの花
かこみしおくつき音信来て
みどりの草葉を束ねにかへ
にほひよき花の一束をば
おのれに手向給はりなば
なれし足音に目をさまして
静にしのびてなれしやかし
心をへだてずしやかし
ともに世にありしやかし
過ぎ行く人々おふならむ
にはこの花をいふがむ
ゆるやかとそよぐ夕か
世にあるごとくおのれも
きかせ給はらばおのれも
夢みし事をば物語らむ
その時たがひに心おちぬ
目をさますほしに心づきて
さらばといはまじいとづかに
君は力つき夕まぐれに
かへり給ふらむおのれに
おのれはふたむおのれに

オフエリヤの歌

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある
貝の冠とつく杖と
はける靴とぞしるしなる

かれは死にけり我ひめよ
渠はよみちへ立ちにけり
かしらの方の苔を見よ
あしの方には石たてり

柩をおほふきの色は
高ねの雪と見まがひぬ
涙やどせる花の環はぬ
ぬれたるまいに葬りぬ

マンフレッド一節

ともし火に油をばいまひとつ
されど我はいぬまでもたむそへて
我ねむるときはいとまことねむりならず
我は時計の如くいまなくうちさわぎつ
ひねは思ひのたに絶えずくるしめられず

わがふさぎし眼はうちにむかひてあけり
されどなほ世の常のすがたをそなふ
なみだはすぐれ人の師とたのむ物ぞかし
世の中のかなしみは人々をさかしくす
多く才ある人は世に生ふる智慧の木の
命の木にはあらぬはかなさをなげくなり
はや我は世中に學ばぬ道はあらず
天地の力もしり哲學をもきはめぬ
そを皆我身のため用ひむとおもへども
なほ我身にはたらず——人のためよき事し
人よりもまたわれによき事をむくはれぬ
なほ我身にはたらず——我身にはあだのあり

それにもそなはれず多くはおのれかちぬ
なほ我身にはたらず——よくもあしきも命も
また勢も思ふ皆人の世にあれど
おのれのし砂の上に雨の心地す
かのあやしき時より物とては恐れぬど
其物を恐れぬ心は我身を責む
のぞき見る物にてもみなしたはしとはおもはず
我はさる業はむくはうごかさず
いざ我の心はくあやしき力
かぎりなき世のさまざまの鬼神
此世をのまきこむ風にかすめる神々よ
けしき山の上に行かひする神々よ
地のそこをのこつておのれはあやしき物のかれし
まもりの力をのぼれよ
汝等をよぶに
まだきたらぬ——

戯曲「曼弗列度」一節

魔 語

らの
恐しきいもて汝等をばはしめむ
かならずしなぬ物のちかもていひむ
のぼれよとくのぼれよとくあらむ
まだきたらぬ——汝等はおのれをばあざける
土地の神風の神我は猶おそろしき
力もて大そらに地獄の如くさまよふ
くだかき星のまもりもていひ出でむ
我むねをくしむるおそろしき力もて
我ほとけりにながらへおそろしき力もて
おそろしき思もてよびのやどるはれよ

When the moon is on the wave,
And the glow-worm in the grass,...

波上纖月光糾紛
When the moon is on the wave,
And the glow-worm in the grass,...

風殘星陽宵螢
死月唱墜炬暗火
林斜桌如高燐
木射狐雨下碧滅
渾千客疾跳生穿
絕壑驚於電中墳
音陰顫電中墳

正是威力加汝時
靈咒無假誰脫羈
形體眠矣心不眠
中夜離枕頻色然
胸裡昏暈難淪滅
心上迷念何可縈結
冥報常在渾不知
恒怯思友難暫離
嗟汝之骨纏弔衣
嗟汝之體陰霧圍
靈咒無假誰克爭
栖息斯境應畢生
尋汝何必趨汝廬
憐汝心眼時對予
堪比空氣無定容
相逐相迫常景從
行止鬱悒如有憂
疑念頻起回汝頭
回汝頭又驚汝心
予本非影無處尋
須記威力長不窮
藏在乎汝胸臆間
予唱斯一篇咒詞
教汝居世歎數奇
何況空際會下神
前路張設蹄與毘

何況風裡聞鬼音
朝暮傾奪歡喜心
休謂眠是天與安
衾枕冰冷成夢難
休謂初旭披汝襟
應願殘日沈遠林
假啼淚多溢肩滿觥
汲烹幾回鍊成藥精
詐交陷人臆生閨泉
血流自泉黑如密烟
笑容艷妖以持兩端
化為虺蛇向途上蟠
一雙絳脣吸之得漿
殺生毒民甚於信霜
少如點塵刺心割腸
盡乎毒乎豈能比方
汝胸如鐵笑容可憐
汝情叵知似無底淵
汝眸子正傲君子顏
汝天性姦內含傲頑
汝多詭謀巧無等倫
汝何自崇敢云處仁
汝驕狠心爲人禱顯
汝如珂因_{珂因人名}_{亞當之子}刺痕宛然
汝之罪盈滿非可寬
即身只應作冥獄觀
疑在觥裡傾汝頭上

涓滴攸觸成汝深障
無睡無死歡事休
天裂星落何破愁
愁極招喚催命奴
奴不能到空嘆吁
看汝傍有魘魅狂攘
禁汝自不聞鎖鑰響
枯汝頭腦萎汝心髓
唯是三語云滅亡矣

野梅

めづる人なき山里は
うばらからたち生ひある
籬の_{かき}もとに捨てられて
雨にうつろひ風にちり
世をわびげなる梅の花
あひみるにこそ悲しけれ

別離

薔薇花何艶
未遂中心願
嬌眸曾流眄
往事皈一夢
有刺盈其枝
一朝苦別離
福社吾所期
茫々不可追